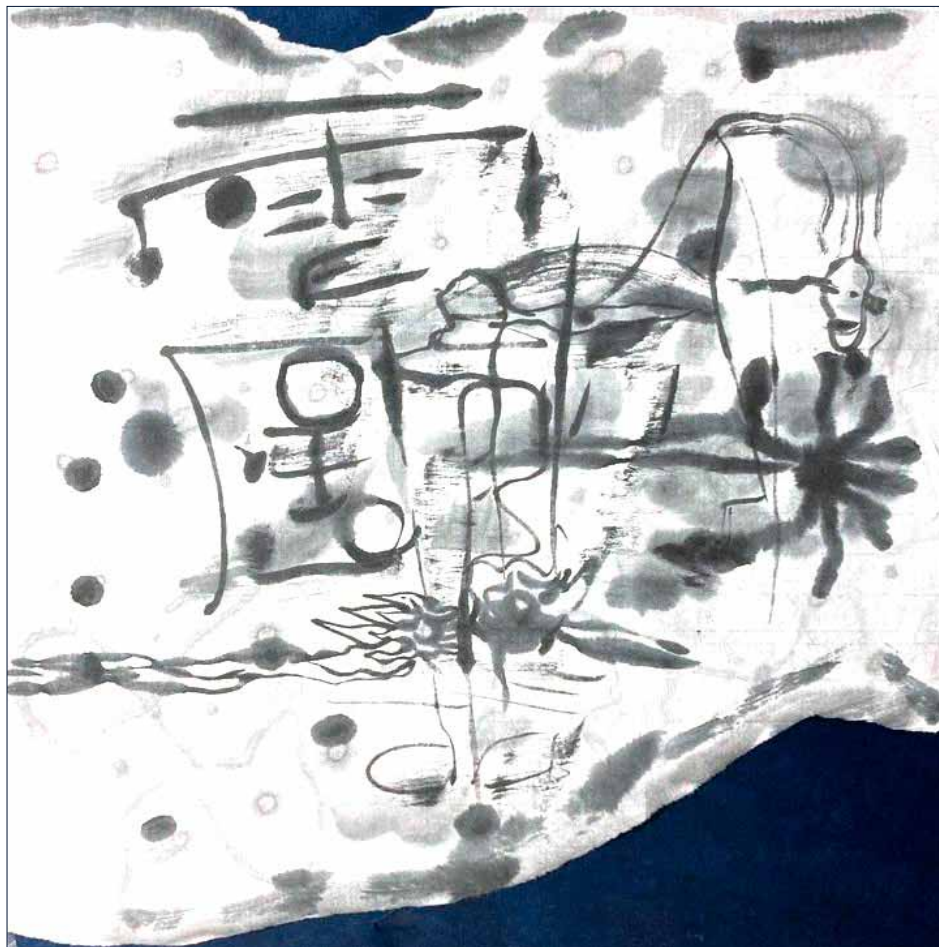


あそ

4

2024



宮 夢見

丁鳥銀座に旧き街の角

曹蚓龜蛇

佐藤竹僊

おほいぢや藤頭並り古部の春

四月集

坐・誹

佐藤 竹僊

初夢や次はもすこし期待せむ

ひとりからひとりにもどる布團かな

雨にふるへ風に打ち伏す冬の草

紅梅のうしろの雪をみてをりぬ

檻の中春の小川はさらさらと

ときをりに沖でめくれる春の海

食べれない草ばかりなり春の庭

食べれるか食べれないのか草芳し

はるさめの浸みこんでゆく石舞台

淡雪は縄を縋ひつつ昏れてゆく

濡縁のあれば居るかとおぼろかな

春の富士一大空氣清淨機



供物

篠田大佳

節分や福なささうな福男
コンビニに福豆の福売れ残り
春節や子供用靴下品薄
遺歌集に留まる作者春寒し
春残響路上ライブを向く七人
右翼政党秘書の着慣れぬスーツ春
春しぐれ消費の街のカフェタイム
雨水はや供物の酒が濡れにけり



陶の雛

須賀敏子

寒禽や残る金柑見逃さず
服を着る犬抗はず残る雪
懐かしく清澄庭園黄水仙
春日和深川めしのほっこりと
図書館へ行きも帰りも梅の花
雛飾る親指ほどの陶の雛



雑詠

都築繁子

桃の花改装済みし美術館

梅三分キックボードのシェアー場所

自転車に釣具一式日脚伸ぶ

伐採の円い切口春日燦

伐採のクレーンが動く春の空

遠景の富士は安けし春の雲

段飾りの雛の優しさ友の幸

H 3

長崎桂子

雪搔や喜びと疲れ複雑

鬼は外お助けお願ひ豆を撒く

川底の見ゆる流れや木の芽ふく

獅子舞や景気よくなれ村二月

被災地の塩田の人や未来を

春野菜あまくやはらかかぐはしき

白梅の香りにはずむ足どりに

紅梅や晴着思へるあでやかさ

「H3」打上げ成功の二月

能登地震浚渫工事復興急ぐ



冬から春へ

森なほ子

数へ日の電車が停止位置ずれる
ハンドクリーム消した灯をまた付けて
寒四郎寒九も過ぎぬ乾び畑
初雪や夜のカーテンを閉め残し
雪の木々一本づつの自己主張
大雪警報テレビの中は大騒ぎ
朝食は和洋折衷寒卵
白湯注ぐ塩引の紅飯の上
あちこちの梅開かせる日差しなり
停車位置ずれし電車の戻る春

雑詠

渡邊京子

月白く血管青し春の宵

年経ても可憐で元氣木瓜の花

飛行機をつかの間抱く春の空

思案する眉間のシワや竹の秋

またひとり去りにし友よ花筏



閏月

赤座典子

葉に一声花に一声シクラメン
暮れ泥む空に紅梅吸はれゆく
付き合ひの長き撫肩猫柳
溢れゐる全面広告春の旅
モルドバのワインを温む雪籠
春寒し餌を待つ鳥のふつくらと
仕事師のSLIMの憩ふ春満月
たよりなき医師の説明冴返る
閏日や五文字決まらぬ夕明り

ゆめまどひぬ

秋川泉

「あかうさぎ」生きてゐたよと雪女
ぽつぽつと雨は小雪の橋の上
猫の声降りしきる夜の雪の中
あてどなくゆく道積もる夜の雪
歓声の上がる深夜の雪合戦
もう嫌と逃げる子供の節分会
春の雪降りしきる夜のすべり台
春の夜ブル・テリア似の顔の痣
シアターのロマンポルノや春一番
いくさありあかごのいのち陽炎のごと



輪島

七郎衛門吉保

煎り大豆能登の大地の厄祓ひ
田楽に輪島の椀の赤と黒
雪を掻くアルミシヤベルのカリリカラッ
夜に雪朝湯のラジオ高英男
アジア系溢るるゲレンデ亀の鳴く
暖冬に餅一枚の残り雪
春立つや席の取り合ひ給餌皿
緑濃き小鉤ふうの葉山椿
海老や鯛顔面白き吊るし雛
春二番株価高値の他人事



一口元宮

篠田純子

一口元宮の椋芽吹きけり
ひと月分の薬分包蠅蚪のひも
コレステロールに善悪のあり納税期
春かはたれ喉を過ぎゆく白湯甘し
よく見れば終の枯葉は蓑虫なり
ほどけつつ絡む遺伝子春の風
春ひかる番の椋鳥の土つつく



採集

白雲をひとつ浮べて雪の原

佐藤 竹僊

白き鷹据ゑて妙齡なる鷹匠

篠田 純子

初金比羅ベビーカーステラ屋の饒舌

熟年家族節も雑煮も各々に

篠田 大佳

元日の夜「地震が治つたらまた遊べる？」

四日はや酒瓶奢侈な塵置場

被災地の能登に寒波の予報あり

宝船うっかり夢を忘れけり

日めくりの格言楽し柚子香る

露天湯や枯れ木の間より青き空

娘と歩む日は燦燦と初袂

長崎 桂子

須賀 敏子

都築 繁子

鈴なりの電車陽気に冬日燦
正月もあつけらかんとハンバーガー
外国に故国の地震を見て寒し
年玉に始まる集ひあと幾歳
元日や曾遊の地に大地震
読むことを怠るまいと去年今年
元日の地震の長きに天仰ぐ
感冒に籠もるひと日の永かりし
初夢の大きな野望打ち捨てぬ
宝船止まずの地震に帆を下ろす
珠洲の七輪窯の崩れて寒威

森なほ子

赤座 典子

秋川 泉

七郎衛門吉保

喜孝抄



冬の日の蟻が読んでおさうな本

佐藤竹僊

冬の蟻は巣の中で本を読んで過ごすらしい。童話のような句です。どんな本か考えてみた。「不思議の国のアリス」、「アリーポッター」？

いや駄洒落は程々にして、蟻は真面目そうだから「ファアブルの昆虫記」に違いない、などと楽しい想像を誘われました。(なほ子)

妙齢の傳道師くる素麺どき

佐藤竹僊

伝道師は宗教の教義を教え広める人、特にキリスト教の布教者で正教師の資格を持たない人と辞書にあります。掲句からではどの宗教かは特定できませんが、信仰が人生の全てとなり、生活感がなくなりかけた妙齢の伝道師が突然家に押しかけてきて、自身の信仰がいかに素晴らしくかと演説を始めます。炎昼の暑さも手伝った伝道師の行き過ぎた熱意に、なんとか穏便に帰ってもらえないかと探り探り話を切り出す、コントのような展開を想像します。(大佳)

少しづつ根雪の構へ白斑

七郎衛門吉保

雪国の本格的な冬の始まりは、初雪の訪れ。降っては晴れを繰り返し、道路以外の山野は白黒

の斑になる。その白が無くなると次の降雪、その間隔が短くなってやがて根雪となる。よく観察して簡潔な一句になっている。(なほ子)

想ひ出の曲多くなり十二月

七郎衛門吉保

人生を振り返った作品、新しいもの、例えば流行り歌などはある年代になると収納袋がいっぱいになつてしまったのか、入る隙間がなくなってくるようだ。世の動きに感度のよいアンテナを張っている吉保さんにしても、「想ひ出の曲が多くなったなあ」と時の流れにおもいを馳せる十二月である。(喜孝)

冬至札どちへ貼らうか古磁石

篠田純子

冬至札を知らなかったので、作者にお聞きしたところ、作者ゆかりの穴八幡宮より冬至に授かるお札だそう。冬至の夜に恵方に貼るとご利益が……。それで年一度の古磁石の出番となる。今の時の物ではない、古めかしい磁石が良い。何かを信心するということは佳いものです。(なほ子)

弥生の遺構出たけど埋める冬日影

篠田純子

一八八四(明治17)年、東京本郷弥生町(文京区)の向丘貝塚で一個の壺が発見されました。その壺が縄文土器とは様子が違い、新しい時代の遺構と認められたことは広く知られている。こ

の句の遺構は、純子さんの住む中央区か、または近くの純子さんの行動範囲の中での新築現場で見かけたのだろう。文化財の保護の立場からじっくり丁寧に調査をしたいものだが、建主は建物を速やかに建てたいと願う立場の対立。慌ただしい冬の日の移りようの中での建築現場である。純子さんは利害関係のないゆえか、もったいないといふ心持でおられているようだ。(喜孝)

少年二人ゐて冬至のバス狭し

篠田大佳

バスが狭く感じるのは少年が二人乗っているから。普通の少年ならそうは思わないから、想像が始まり、大柄で派手なジャンパー、ピアス、バスよりバイクに乗りそう等々……。冬至は夜が一番長い日。少年達の夜も今が一番長いのかも。(なほ子)

白杖を置いて漂ふ蜜柑かな

篠田大佳

句意を理解して書き始めている訳ではない。分からぬながら魅力を感じ採りあげさせていた。白杖の人を傍からみていると、何か手助けをすることは無いかとおもすが、その人は全く恐れもなく歩道を進む。躊躇なく進むその速度におそれいる。この句の「蜜柑かな」は蜜柑園または蜜柑が成つてゐる木のあるお庭の句ではと想像した。杖を置いて行動するようすを「漂ふ」と詠まれたのだろう。馴れた視覚障碍者でも杖を失うと「漂ふ」のかも。「蜜柑かな」がこの句の情景を描き切らず、作者の意図を十全に伝えていないのではとおもすが、白杖を手から離れた人の様子を「漂ふ」と詠まれたことによく見ておられるとおもった。初めに書いたが自信がある鑑賞ではない。(喜孝)

賞ではない。(喜孝)

小春日やデジタル化って誰の為

須賀敏子

見通しの甘いデジタル化によって、多くの人の負担が増えています。句意とは離れますが、企業の会計は、紙の帳票は全て電子データにしなければならぬと法令で定められていて、会計担当者の負担が大きくなっています。デジタル化の複雑さに困惑と多忙の日々に、小春日を感じる事ができるほど心に余裕ができると、ようやく問いを立てることができるようになります。掲句から現場の悲鳴を想像しました。(大佳)

砕け散る波の白さや枯岬

須賀敏子

敏子さんは身辺詠が多い印象。掲句のような自然詠は珍しいのでは。昨夏、伊豆の城ヶ崎で押し寄せてきた浪が、岬の巖に塞がれ行き所を失ない白波となつて巖を這いのぼる雄大な景を見たことがある。一句作ろうと考えたが、どうしても季語が据らず捨てた。その経験から敏子さんの「枯岬」に感心した。砕け散る波の白さが印象的に詠まれている。(喜孝)

短日の鎮もる時間青磁展

都築繁子

日比谷の出光美術館で青磁展をやっていました。掲句は、美術館の様子を詠んだものと思われ

ます。冬の美術館で青磁器を見ている作者ですが、落ち着いた雰囲気美術館は、冬の慌ただしい時間の流れを落ち着かせるように、時が止まったかのような感覚を覚えます。(大佳)

§

美濃・瀬戸・有田・志野・備前・伊万里・益子……と日本の焼き物は数えきれぬほどあり、それぞれ美を競っている。青磁はこれらの焼き物とは全く違う雰囲気を漂わせている。と、ど素人の私でもおもふ。繁子さんはそれを「鎮もる時間」と捉えて成功した。(喜孝)

冬の昼太陽あれば笑ひの渦

長崎桂子

地域の防災演習でしょうか。寒いせいか、あまり意欲的でない人が多いのか、集まりが悪かったようです。孤立化していく地域の現状に対する作者の困惑を読みます。(大佳)

冬の昼太陽あれば笑ひの渦

長崎桂子

数人が日向ぼこをしている景が浮ぶ。日向ぼこは出来そうだが、わたしはまだできないでいる。掲句は「笑ひの渦」で大らかで平和で楽しい一句が生まれた。(喜孝)

爪切って一人の時間冬日向

森なほ子

連作中、落花生を味わって、豆殻の後始末をしてと、続く物語にふと感慨が入ります。たまたま一人で過ごしているのでしょうか。食べ殻を集めているうちに、ふと指先を見ると、爪が伸び

ていて、ついでに爪を切るという日常の様子を想像しました。一人の時間は寒いながら、どこか暖かい感じがします。(大佳)

満天星に紅を重ねて落葉かな

森なほ子

なぜ「どうだんつつじ」を「満天星」と書くのだろう。調べたいがまだ調べていない。満天星の小粒な密生している葉の紅葉は隙間なく見応えがある。その紅葉の上に何の紅葉であろうか。満天星より大きな葉の紅葉が乗っかっている。「落葉かな」とあるが枯れた落葉ではない。「紅を重ねて落葉かな」である。言葉を選んだ見事な写生句である。(喜孝)

冬柏些細な夢に支へられ

赤座典子

若い人の文化を覗くたびに、過度な情報獲得が若い人から夢を持つことを奪っているように見えます。この場合の夢は、生きることに対する抛りどころというところでしょうか。掲句は、夢によって気力を維持していると読みました。取り合わせの冬柏は落葉植物で、秋に紅葉するけれども、冬でも葉をつけています。冬柏の頼りないながらもなんとか枝にしがみついている様子が「些細な夢」のイメージを補完しています。(大佳)

ぬひぐるみ並べなほして小晦日

赤座典子

「小晦日」は惹かれることばである。一度ぐらい日常生活で使ってみたい、使うような生活にあらがれる。正月を迎えることにあたふたした生活の中では、使う言葉ではないやう。典子さんは新年を迎える一日前に準備も整い、ほっとされている。ぬいぐるみを並べなおしてゆとりのある時が流れる。こんなところにも豊かな余生がある。(喜孝)

切通し開けた先に雪の富士

秋川 泉

無駄が無く鮮明。狭く圧迫感のある切通しはおのずと早足になるものですが、それを抜けると目の前がパツと開けて、なんと正面に雪の富士が。近々と見る富士はいつ見ても感動しますが、白い富士はなおさらでしょうね。そんな所に行ってみたいものです。(なほ子)

幼子を担ぎ上げてのおかめ市

秋川 泉

酉の市に出かけたことはあるが熊手を買ったことはない。熊手を買うというより一句を成そうという邪心が勝っていた。大きな熊手を担いで帰る人は地下鉄やバスでの帰宅は難しいと余計な心配もした。掲句は熊手ではなく幼子を担ぐということに、この酉の市の場でのおかしみが生じる。確かに子の手を引いて歩けるような酉の市は寂しい。掲句のように酉の市は賑わっていてほしい。

(喜孝)

令和四年のわたしの一句

白インクの詩集に見えし枯木山

七郎衛門吉保

人の縁と誘いに乗って「あを」に参加したのが二十六年一月号から。おこがましくも当初より俳号など使って、分かったような振りをしているが、これが俳句だと人様に自慢できるような句は未だ持てないでいる。当初より「自分の記憶の日記替り」としたスタンスから生まれる俳句には、説明や報告や主張臭を伴う句が多くなり、俳句本来の諧謔性に欠ける傾向が強く、面白みが少ない。また、発想源となる事象と、飛躍した言葉の組み合わせによる、言葉の遊びを伴った俳句が難しい。そんな中で、昨年二月に酸ヶ湯・八甲田方面に旅した折の一句「白インクの詩集に見えし枯木山」では、白インク・詩集の飛躍した二語により、季語が生き生きとした一句ではと、私の一句となった。

あとがき

表紙

宮夢見さんは居酒屋「ボルガ」で知り合った画家である。高島茂さんらと中野坂上で飲み散会。夢見さんはその日なぜか家まで蹤いてきた。仕事場に着くと絵を描きたいといふ。仕事用の紙ならいろいろあるが画家が使へるものはない。困って補修用にとつてあつた古い画仙紙を出した。変形の端紙の形のまま端まで使つて楽しさうに描いて帰つてゐた。今取り出してみて懐かしくながめてゐる。

竹内弘子さん

竹内弘子さんが三月四日に逝去された。と、渡邊京子さんからお知らせを受けた。『あを』創刊会員で活躍されたが病を得、二〇一八年六月号以後作品を見なくなった。

彼女はおしとやかに見えるがさうではない。心を曲げぬ人であつた。そして草笛の名手でもあつた。

時は春、芳ばしき葉を選んで思ひ出のしらべを奏で
てゐることだらう。

青葉冷え足にまつはり魚板打つ

竹内 弘子

和服著てゆくところなし亀鳴けり

食へるたび頤が鳴る桜どき

青田道きて検診の列につく

煮魚の眼を舐りをり春の暮

『あを』二〇一八年六月号 『あを』

喜孝

二〇二四年四月号

発行日 四月二日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

竹僊房

印刷・製本・レイアウト

カット／福井美佐子・テイリエイマ

ゆうちょ銀行（普）会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）